

「変わりゆく街並み、変わらないもの」―日銀金沢支店の移転雑感―



日本銀行金沢支店
支店長 吉濱 久悦

2014年に金沢市内で撮影された写真に、日銀本店の管財課長であった筆者と関係者数名が写っている。当時の筆者は、数十年以上は使用する日銀支店営業所の建物を順次改築するともに、その際の拠り所となるポリシー―細則の制定を所掌する立場にいた。写真は、金沢支店改築に向けた調査視察のコマだ。

2枚の写真がある。左は、金沢市香林坊の2代目金沢支店（1954年竣工）。右は現在の秋田支店（1952年竣工）。設計者は別だが、驚くほど似ている。次に、日銀本店本館・旧館・新館の外観。辰野金吾設計の本館（1896年竣工）と、辰野の弟子、長野宇平次設計の旧館（1938年竣工）は見事に外観が調和する。一方、背後の新館（1973年竣工）は白を基調とした現代建築である。長い風雪に耐えてきた日銀の建物には、各時代の建築様式・技術が採り入れられ、現在にその姿を止めている。ただ、①中央銀行の安定感・信頼性を象徴する意匠、②機能面では、災害時など非常時でも業務遂行できる機能的、かつ堅牢なつくりという点は共通している。中でも、意匠として目を引くのは、安定感と信頼性を表す、「列柱」がかたちを変えながら採用されていることであろう。

各時代により意匠は変化し、求められる機能も高度化する日銀支店のあり方について、指針を定めるのは容易ではなかったが、思案の末、建築意匠については、「華美な意匠は排し、中央銀行の建物としての品位を兼ね備えた意匠」とした。指針全体では、①地域的・社会的要請への配慮、②機能性の確保、③業務継続力の確保、④セキュリティの確保、⑤柔軟性、メンテナンス性の確保を軸に構



金沢支店2代目店舗



秋田支店

成しているが、人々が最も身近に感じる意匠には、いつの時代にも、中央銀行として安定感・信頼性を建物の姿から感じてもらいたいという思いを込めた。

2023年11月、金沢支店は、香林坊から広岡に新築移転した。



日銀本店①本館・②旧館・③新館



金沢支店3代目店舗

全国32支店のうち、規模が大きな支店が移転するのは、1992年の広島支店以来、約30年振りの大プロジェクトであった。銀行券の発行流通をはじめ、金融機関の資金決済、経済情勢の調査分析など、中央銀行機能を停止することなく、移転を実現させることは、困難が予想された。金沢支店は北陸の基幹店舗であるが故に、近隣に他支店もない。移転作業は、日銀ネットをはじめとした各種システム機器のほか、現金受払機器の移設や、セキュリティを守る各種設備の立ち上げ、管理等、日銀特有の業務に付随する移転作業の項目は膨大な量である。現金輸送は、営業日の合間を利用して、大量の現金を輸送する必要があり、行政警察などの関係先との調整・連携も不可欠であった。支店長として、日々の緊張感から解放されることはなかったが、地元行政警察、財界、そして日銀本支店の応援者の支えにより、想像を超える順調さで、移転作業は完了した。あらためて、関係者全員に感謝の意を表したい。

十年以上前に見渡した広岡の景色は、現代的なオフィスビル等の建設が進んだことで、大きく変化した。「渾桑之姿」(そうそうのへん)という言葉を使いたい。その角に建つ、3代目金沢支店は、黒瓦をイメージしたダークグレーのステンレスパネルが特徴の新都心に相応しい現代建築である。そして同時に、フロアを縦つなぐ、パネルは列柱を模している。新支店もまた、安定感と信頼性を象徴する日銀建築の伝統を受け継ぎ、中央銀行としての役割をしっかりと果たすという強い意志を表している。

